

# 近世日本語の事態描写にかかわる 二字漢語サ変動詞語幹の名詞用法について —名詞句の構文・意味的考察を中心に—

佐藤 佑

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

## 要 旨

サ変動詞語幹が名詞として事態に言及する用法“SN”(呼吸〈呼吸スルコト〉, 破壊〈破壊スルコト〉)の歴史的変遷を探る足がかりとして, 漢語サ変が激増したとされる江戸末期までの約 200 年に書かれた, 特に書き言葉的な諸作品を対象に, 同形式のうち二字のものが構文・意味的に現代語とどのような相違を見せるか分析した。その結果, 近世の日本語の書き言葉には, ①単体の SN, 殊に一般論としての事態に言及する例の割合が極めて高い, ②SN と共起する機能動詞(勉強をする, 稽古を始める……)のバリエーションが現代語に比べ少ない, ③現代語に比べ, 形容詞的に用いられるなど名詞用法が未発達な SN(通達, 発明……)がある, ④逆に現代語では限られた範囲でしか用いられない(少なくとも SN とは呼べない)か, そもそも消滅しているような SN(是非, 長命, 悟入……)も見られる, ⑤「ごと(事)」「人」「者」などの接尾辞を伴い抽象名詞・具体名詞を形成する事例(建立ゴト, 吟味人……)が質量ともに乏しいといった事実が明らかになった。

## 1. はじめに

現代日本語において, サ変動詞(呼吸する, 破壊する, 譲渡する…)は一部の例外(与する, 相反するなど)を除き, その語幹が第一義的には<sup>1</sup>「○○(=対応するサ変動詞の表す動作・作用)すること」意の抽象名詞として用いられる(呼吸:呼吸すること意, 破壊:破壊すること意, 譲渡:譲渡すること意)。やや古いデータではあるが, 宮島(1977:25-27)などでは現代日本語の語彙においてそうした事態描写に用いられるサ変動詞語幹は和語動詞連用形の転成名詞(考え, 違い…)より大幅に多いといった指摘がなされている。

<sup>1</sup> 文脈次第で, 動作の特定の側面(様態など)や, 動作の結果としての産物などの具体物に言及する場合もある。たとえば「呼吸が荒い」と言った場合, 「呼吸」は「呼吸すること」そのものというよりは「呼吸の仕方」に, 「壁の装飾を壊す」であれば「(壁を)装飾すること」ではなく「(壁を)装飾する物」に言及している。前者は事態を直接的に指示していると言える(本研究で扱う「サ変名詞」に含まれる)が, 後者はその限りではない(本研究の主たる対象には含まれない)。

サ変動詞、殊に漢語を語幹とするものについては、進藤（1963）に、明治期に諸外国語の様々な概念を導入する必要から、当時の教養の基盤であった漢学の影響を色濃く受けて激増したとの指摘がある。進藤（同）の調査によれば、江戸語において用いられるサ変動詞には仏教用語が多いとされるが、ではそれらの語幹はどのような場合に、どのように用いられていたのであろうか。また、現代に比べてそれらの名詞性、名詞としての用いられ方の柔軟さ（たとえば文の成分としてどの程度自由に用いられるか、といった事情）はどのようであったのであろうか。

本稿では近世、特に進藤（前掲）などで漢語サ変動詞が激増したとされている以前、特に漢学そのものは盛んに行われていたが「諸外国語の様々な概念を導入する」動機は開国後に比べて弱かったであろう時期の日本語のデータ分析を通じて、当時の漢語サ変動詞の語幹（漢語サ変名詞）の中でも特に二字（以上）のものの使用実態がどのようであったかについて調査・記述し、将来的に三字以上の漢語および和語・外来語のサ変動詞語幹をも対象に含めた、より体系的な通時研究を行うための足がかりを作ることとする。

## 2. 研究の方法

### 2.1. コーパスの作成

本稿では、国文学研究資料館提供の「日本古典文学大系本文データベース」を利用し、テキストデータを基にして構築したコーパスを用いる。代表性については少なからず問題が残るが、特に当時の書き言葉の代表として、先鋭的に漢語の概念を取り込んでいることが期待される「評論・国学」のジャンルに区分される15作品を対象とする。コーパスの具体的な作成方法は、各作品について「タグ無し・傍記無し」で全文表示させた本文をテキストファイルに変換した後<sup>2</sup>、GREPによる絞り込みを行い、用例を抽出してMicrosoft Excel<sup>3</sup>に貼り付け整理する、というものである。検索・テキスト化の作業は2009年7月2日時点で公開されているデータを対象に行った。

15作品の詳細は次ページの表に示す通りである。間が空く時期もあるが、概ね17世紀中頃から幕末までの書き言葉を反映していると言えよう。これらに対し、話し言葉（当時の庶民の言語使用）を如実に反映したものとしてしばしば言及される（進藤1963など）浮世草子・洒落本などの文学作品があるが、それらについては以前小規模ながらパイロット調査を行ったところ、漢語サ変名詞の出現頻度も低く、またそのバリエーションも乏しかったことから今回は調査対象に含めなかった。将来的にはより幅広い、体系立てた調査・分析を行う上でそれらも扱う必要があることは言うまでもない。

なお、データ化の底本となった『旧全集』は、『94巻 近世文学論集』（1966年12月初版発行）、『95巻 戴恩記・折たく紫の記・蘭東事始』（1964年10月初版発行）、『97巻 近世思想家文集（1966年6月初版発行）』の3冊である。成立年代などの確認には、これらの底本

<sup>2</sup> 元データの不要な改行を一括して削除するため、句点の直後に<BR>タグを挿入して一旦HTMLに変換し、ブラウザ上で全選択→コピー→テキストエディタに貼り付けるという手順を執った。

<sup>3</sup> Microsoft Excel 2003を使用。

を適宜参照した。

[表 用例出典の詳細データ]

タイトル	著者	発行年または成立年代	文字数 (除スペース)	巻 (旧全集)	備考
国歌八論	荷田在満	寛保 2(1742)年刊	12,835	94	
歌意考	賀茂真淵	明和元(1764)年成立か	5,877	94	
源氏物語玉の小櫛	本居宣長	寛政 11(1799)年刊	21,221	94	抄録
歌学提要	内山真弓	天保 14(1843)年刊	14,704	94	
徂來先生答問書	荻生徂徠	享保 5(1720)年頃成立か <sup>4</sup>	40,616	94	抄録
詩学逢原	祇園南海	正徳 2(1712)～寛延 4(1751)年 <sup>5</sup>	19,168	94	
作詩志彙	山本北山	天明 3(1783)年刊	38,728	94	
淡窓詩話	広瀬淡窓	文化 14(1817)年 ～安政 3(1856)年 <sup>6</sup>	27,378	94	
戴恩記	松永貞徳	正保元(1644)±3年?成立か	39,761	95	
童子問	伊藤仁斎	元禄 6(1693) ～宝永 2(1705)年執筆	87,831	97	
玉くしげ	本居宣長	天明 7(1787)年刊	15,178	97	
都鄙問答	石田梅岩	元文 4(1739)年頃成立	71069	97	
翁の文	富永仲基	延享 2(1745)脱稿	9837	97	
自然眞營道	安藤昌益	宝暦 3(1753)年刊	44,125	97	抄録
統道眞傳	安藤昌益	宝暦 2(1752)年頃成立か	8,303	97	抄録

計 456,631 字

本稿の主たる考察対象は漢語サ変名詞であるが、そもそも何がサ変動詞であるかが定かでないため、まずは GREP で漢語サ変動詞の用例を絞り込み、収集した(集めたサ変動詞の例も、補足として用いることがある)。GREP には正規表現 [巫-熙●■][さしすせじずぜサシスセジズゼ仕為爲]<sup>7</sup> を用い、絞り込んだ中から漢語サ変動詞およびサ変動詞を抽出した<sup>8</sup>。

<sup>4</sup> 書簡の応答として成立。

<sup>5</sup> 没年までに書き溜められたものをまとめて刊行。

<sup>6</sup> 『醒斎語録』(没年までの談話をまとめたもの)からの抄録。

<sup>7</sup> 「日本古典文学本文データベース」では JIS 外字が●および■に置換されているため、これらをも検索し、サ変動詞と思しき例は随時底本となった『日本古典文学大系』を参照し、本来の文字列を復元しつつ作業を進めた(ただし、結果として後述する用例数などの条件を満たしたものにこれらを含む語はなかった)。「つかまつる」「たてまつる」「いたす」などの補助動詞も「す」に準ずるものと見る向きもあるが、必ずしも本動詞との境界が明らかでなく、また後述(2.1.)するように機能動詞結合と動詞用法の連続性を考える上で多々問題になることから検索対象には含めず、従ってそれらの語形が得られたことだけをもってサ変動詞の認定は行わないこととする。

<sup>8</sup> この検索条件では仮名表記された漢語が検索できないことになるが、専ら仮名で書かれるとすればそれは漢語の語源意識が希薄な、当時の時点で日本語に溶け込みきった語と考え、当面は問題にしないこととする。

得られたサ変動詞・ザ変動詞は、異なり語数で 1426 語（延べ用例数 3943）であるが、うち 21.7%に相当する 310 語を一字漢語のものが占め（延べ用例数では 2126 で半数以上に上る）、そのサ変・ザ変動詞に占める割合は筆者の直感するところの現代語のそれと比べ目立って高い。もっとも、当時と現代とで送り仮名の用いられ方が異なることもあり、漢語サ変であるか和語（多く一段・五段）であるかの判別がつかない例もままあることが問題になる。たとえば、用いられる文脈にもよるが、「徹す」「食す」はそれぞれ「てっす」「しょくす」であるか「とおす」「くはす」であるかが、（終止形・連用形・已然形の場合に限っては）確言できないのである。また、これらの多くは現代語には残っておらず（閲す、諷す、點ずなど）、残っているもの（制す、案ずなど）についてもその語幹は現代語ではごく限られた範囲でしか用いられないと考えられ<sup>9</sup>、比較すること自体が難しいと考えられる。

このような問題から、本稿では二字以上の漢語サ変動詞語幹を対象を絞ることにする。ただし、「平仄穩帖す」「剽襲摸擬す」など語幹が二字以外（これは今回の調査範囲において四字であることとほぼ同義であるが<sup>10</sup>）の語については、全体が一語のサ変動詞語幹として機能しているのか、二語が並列しているのかが定かでないため、いったん二要素に分割して分析した。

本調査では、臨時的にサ変化されている（あるいは格助詞ヲやそれに類する助詞の類が省略されている）ような例をある程度除外する目的で、「〇〇（語幹。連体修飾要素を伴うなど、名詞として用いられていることが明らかであるものは除く）す」およびその終止形以外の活用形（〇〇せ/し/する/せよ）の実例が 3 例以上得られている 130 語（すべて二字漢語サ変動詞。延べ用例数 682）に限ってその語幹による再検索を行い、名詞としての用法を抽出した。

サ変動詞語幹の名詞用法の中でも、事態に言及するものの認定には、佐藤（2007, 2008, 2009）と同様、西尾（1961）の分類を参考にする。すなわち、「1 動作・作用など」に含まれる「イ 動作・作用そのもの（何々スルコト：泳ぎ、調べ、貸出し など）」、「ロ 動作・作用の内容（何々スルトコロノコトガラ：考え、教え、望み など）」、「ハ 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど（金遣い（が荒い）、滑り（がいい） など）」と同様の意味を持つものをサ変名詞と認定し、逆に西尾の分類で「2 動作・作用の所産・結果（何々シタモノ）」以下に分類される類の名詞はサ変名詞としては扱わない。以上を踏まえて用例を収集した結果、77 語について事態に言及する名詞用法の実例計 791 例を得た<sup>11</sup>。

事態に言及するサ変名詞（以下“SN”と略称する）の用例が得られた語、得られなかつ

<sup>9</sup> 現代語についてはサ変動詞語幹の用例を収集中であるが、現時点で一字漢語サ変動詞語幹の名詞用法の実例は得られていない（「恋」「旅」など和語のみ得られている）。なお、現代語において「愛」（4 例）に対応する「愛する」は、他のサ変と活用の体系が異なるため、五段・一段活用でもサ変でもない特殊活用として扱う方針である。今回の調査範囲では「愛す」はサ変である（未然形が「愛せ」である）と判断されるが、本稿では対象を二字漢語に絞るため深くは立ち入らない。

<sup>10</sup> 唯一語幹が三字であったのは「相〇〇す」というタイプ（〇〇は漢語要素）であるが、いずれも和語要素「相（あい）」が含まれるため、単純に漢語サ変動詞とはいえない。そのため、二字の漢語要素のみを抽出し（二字）漢語サ変動詞の実例としてカウントした。

<sup>11</sup> 語幹による検索の結果、「御覽可被成候」（ごらんなさるべくそうろう）など、動詞用法と考えられる（ただし表記は漢文式の）例も計 47 例得られた。

た語について、それぞれ以下に一覧を示す。また、現代語でもサ変動詞および語幹の名詞用法が両方生きていると思われるもの<sup>12</sup>には囲み線を付す。いずれかの字に異体字のある語は、多い方の表記で統一する。なお、言うまでもないが検索は可能な限り異体字を考慮に入れつつ行った。

※名使用法が得られたものについては、**SN**全用例数 ([SN が単体で用いられる例の数]+[連体修飾を受け名詞句を形成する例の数]+[複合名詞を形成する例の数]) として示す。

○名詞用法が得られたもの……**賣買** 21 (20+0+1), **食食** 7 (7+0+0), **讚歎** 1 (1+0+0), 盡極 1 (1+0+0), **發明** 5 (3+1+1), **歸國** 1 (1+0+0), **變化** 13 (11+2+0), **收斂** 4 (4+0+0), **擴充** 10 (9+1+0), **學問** 186 (145+32+9), **剽竊** 23 (21+2+0), 剽襲 13 (12+0+1), 療治 7 (4+3+0), **流行** 4 (3+0+1), **落着** (落著) 2 (1+1+0), **摸擬** 13 (11+2+0), **迷惑** 3 (3+0+0), 迷吟 2 (1+1+0), 捧腹 1 (1+0+0), **返答** 6 (1+5+0), 平治 2 (1+0+1), 不耕 12 (9+3+0), 反求 3 (3+0+0), **突出** 1 (1+0+0), **得心** 4 (3+0+1), **通用** 21 (8+7+6), **通達** 3 (2+1+0), 直耕 82 (58+20+4), 長命 1 (1+0+0), **大言** 1 (1+0+0), 打擲 2 (2+0+0), **相傳** 10 (5+2+3), **祖述** 3 (2+0+1), **詮議** 1 (1+1+0), **穿鑿** 3 (2+1+0), 生生 13 (11+2+0), **生成** 1 (1+0+0), **成就** 4 (3+1+0), 是非 49 (32+15+2), 推取 1 (1+0+0), 進退 32 (20+11+1), **信仰** 3 (2+0+1), **上洛** 5 (4+0+1), **上達** 7 (6+0+1), **照應** 9 (3+6+0), **熟讀** 4 (4+0+0), **修行** 14 (9+5+0), **取捨** 5 (3+2+0), 煮熟 6 (6+0+0), 自行 17 (5+12+0), **殺生** 17 (14+3+0), **困窮** 2 (2+0+0), 行路 4 (4+0+0), **工夫** 22 (13+8+1), 悟入 1 (1+0+0), 御覽 5 (5+0+0), 憲章 1 (1+0+0), **建立** 4 (2+1+1), 決定<sup>13</sup> 2 (2+1+0), **稽古** 8 (5+2+1), **形容** 1 (1+0+0), 具足 5 (4+0+1), **苦勞** 2 (1+1+0), **吟味** 4 (2+2+0), 凶年 5 (5+0+0), 感合 1 (1+0+0), **感激** 1 (1+0+0), 疫病 1 (1+0+0), 運回 9 (8+0+1), 一和 1 (1+0+0), **一定** 9 (9+0+0), 暗合 2 (2+0+0), 安食 1 (1+0+0), **干涉** 1 (0+1+0), **尊信** 1 (0+1+0), **隱居** 1 (0+1+0), 昇殿 1 (0+0+1)

○名詞用法が得られなかったもの……**維持**, **一變**, **餓死**, **開發**, **感心**, 感通, 感伏, 甘心, **貫通**, **玩味**, **吟詠**, 見性, 固有, 講究, **混雜**, 裁成, 輔相, **自得**, **主張**, **取捨**, **出生**, **出張**, **抄録**, 粧點, **成長**, **説明**, **先後**, 促迫, 尊崇, **鍛練**, 紬繹, **停止**, 等對, **踏襲**, 破却, **排擊**, 反求, **筆記**, **勉強**, **枚舉**, **明辨**, **摸倣**, 理會, 離絶, 和合, 和洽, 假借, **會得**, **傳受**, 辨知, **斷絶**, 稱譽, **諷詠**, 闡明, 體察

<sup>12</sup> 『大辞林』第2版 (goo 提供のオンライン版, <http://dictionary.goo.ne.jp/jn/>) で、作例が挙げられるなど現代語においてサ変動詞化することが明らかとされるものに限る (サ変動詞の用法として終戦以前の例のみが挙げられているものは除く)。同サービスでの検索は2009年7月31日に行った。

<sup>13</sup> 「ジャパンナレッジ」内『日本国語大辞典 第二版』(オンライン版) (2009年9月10日検索) によれば、この字で「けつてい」と読ませる最初の例は『授業編』(1783年)であり、本稿で唯一「決定」のデータが得られている『都鄙問答』より新しい。従って、今回の調査範囲で得られた「決定」は13世紀が初出(中院本平家)である「けつじょう」(きまること。あることが定まって動かないこと。また、信じて疑わないこと)の方であると考えるのが妥当であろう。

現代語においては、単体で用いられる SN が接頭辞「お」「ご」を伴うか否かは、敬意の付加の有無以外に格段 SN の意味・用法などに影響しないと考えられるため、近世語の SN 収集に際してもそれらの有無は特に意識しなかった<sup>14</sup>。ただし、特殊な構文においてこれが必須となるような場合 (2.2.の一部) など、現代語と同列には扱いたい例については本文中で言及することがある。

なお、『歌学提要』『徂來先生答問書』『詩学逢原』『作詩志毅』『淡窓詩話』『戴恩記』の 6 作品は、本文データに漢文の箇所があるが、いずれも序文や、一部漢文の他作品を引用したもので、全体からすればごくわずかな範囲に限られる。これらにおいて得られた用例は本稿では用いないこととするが、各テキストデータからこれらのみを除き、対象のより正確な文字数を示すことは、筆者の技術不足もあってかなわなかった。

## 2.2. 分析の方法

現代日本語の動詞性名詞 (VN)<sup>15</sup> のコーパス (佐藤 2008) から、漢語 SN のデータを取り出し、近世語の同形式と使用実態を比較し、特に現代語と大きく異なる諸特徴について重点的に取り上げ記述する。これに関して、現代語のコーパスの構築に利用した言語作品が専ら文学作品 (小説) であることから、今回収集したデータとの位相の差も少なからず問題になるが、そうした問題については考察を進める中で適宜言及する。

本調査では漢語サ変動詞の使用実態のみ比較を行ったが、将来的には和語サ変動詞 (出入りする、大笑いするなど) や外来語サ変動詞 (チェックする、ダッシュするなど) がどのように成立し定着してきたかについても調査することで、本研究はさらに意義深いものとなろう。特に前者については和語複合動詞との兼ね合いからどのような変遷を辿ってきたかなど興味深い問題も多い。後の研究に委ねたいところである。

## 3. 二字漢語サ変名詞の構文・意味的考察

現代語との大きな相違点として、漢語 SN が連体修飾・複合により形而下で具体化の手続きを受ける例が少ないことが挙げられる。現代語では、連体修飾を受けない、すなわち単体で現れるものが、漢語 SN を用いた名詞表現 (漢語 SNP) 全 730 例中 314 例、割合にして約 43% であるのに対し、今回の調査範囲では全 791 例中 592 例、74.8% あまりが単体の SN であり、その出現率は現代語に比べ目立って高い。一方、連体修飾を受ける SN は 161 例 (約 20.3%、現代語では 313 例≒42.8%)、SN を後項とする複合語は 39 例 (約 4.9%、現代語は 103 例≒14.1%) と、いずれも少数にとどまる。

以下では、このような偏りに着目しつつ、佐藤 (2008,2009) で行った現代語の SN の用

<sup>14</sup> ただし、現代語でも「お祝い」「お祈り」のように「お」を伴わないと SN として用いられない例があり、語種を問わず考察する際にはこれら接頭辞の有無が問題になることもある。

<sup>15</sup> 「(対応する動詞の表す) 動作・作用を実行・実現すること」意の抽象名詞として用いられるサ変動詞語幹 (SN) ・動詞連用形 (YN: 動き、繕いなど) の総称。

法上・構文上の諸特徴に関する分析結果<sup>16</sup>と適宜比較することで、当時の SN の使用の実態を明らかにする。

なお、以下で SN の用例を掲出する際には、SN に囲み線を付し、それを修飾する連体修飾要素は下線、複合語を形成する場合は前項を網掛けで示す。

### 3.1. SN・名詞間の項関係と一般論

現代語では、以下に挙げる (ア) - (ウ) などに見られるように、SN に対応するサ変動詞の項に相当する名詞 (おばあちゃんが喫煙する、ガソリンを運搬する、桃井先生と約束する) が漢語 SN を修飾して SN 句を形成する例は多数見られ、手元のデータでは 134 例と漢語 SN 句全体の 4 割強に上る。

(ア) まいは、おばあちゃんの煙草は全然気にならなかった。おばあちゃんもそれを知っていた。けれども、ママはまいの喘息を盾にとつて、パパの煙草をやめさせていたし、おばあちゃんの喫煙も昔から嫌っていた。(西)

(イ) 「(略) 今の時点では、自殺ではありえない、とだけは断言できるよ。火をつけるために使われたもの——マッチでもライターでも何でも、それが現場から発見されていないし、ガソリンの運搬に使ったものも残っていない。(略)」(ブ)

(ウ) 勿論私は約束は守る。特に 桃井先生との約束は。(神)

近世語でも、同様の例は以下の (1) (⇔金銀が通用する) (2) (⇔詞を吟味する) を含め 72 例が見られる。SN 句の用例全体に占める割合で言えば、約 45.8% と現代語をも上回っている (SNP 全体に占める割合で言えば現代語が上回るが)。ただし、上掲の (ウ) に代表される複合格助詞の例は見られない。

(1) <sup>17</sup>鳥ノ世ニハ金銀ノ通用無レバ、欲・迷・盜・亂ノ事、絶テ無シ。(自)

(2) 歌よみは詞の吟味肝要なり。(作)

佐藤 (2009) では、SN および「動き」「繕い」などの連用形名詞 (YN) を含む動詞性名詞 (VN) が、その動作・作用の主体や対象の項をノ格の形で取る場合の諸条件について以下のようにまとめた。同様の分布は、(1) (2) をはじめ今回扱った近世語の資料にも見られるものである。

・同一の文脈において、一貫してある主体に言及している場合、VN にとっての主体が改め

<sup>16</sup> これらの調査は和語・外来語の SN (家出、トレーニングなど) も一括して行っているが、語種によって格別 SN の意味や用法に偏りは見いだせていない。ただし、今回はあくまで漢語 SN に対象を絞るため、本稿で挙げる現代語の用例数・割合などの数字はすべて漢語 SN のものである。

<sup>17</sup> この例は本節において連体修飾の例として (VNP 内の構造に着目して) 扱われているが、VNP の構文上の特徴に目を向ければ後述 (2.2.) する機能動詞結合の例でもある。このように、本稿での分析は様々な角度から行うものであり、分類は必ずしも各々が排他的なものではない。

て VN 句に明示されることは稀である（→対応するサ変動詞が一項動詞であれば VN は単体で現れ、二項動詞以上であれば対象などの項が現れる：項の省略）。

- ・当該の VN 句が VN 句の主体以外によって描写される場合、主体は表出しうる（→一項動詞・二項動詞以上を問わず主体の項が現れる）が、主体が当該の VN 句を含む文の主語と同一である場合は表出する余地がない（→一項動詞であれば VN は単体で現れ、二項動詞以上であれば対象の項など主体以外の要素が現れる：項の消去）。
- ・VN にとっての対象がノ格で現れるのは、その主体が当該の VN 句を含む文の主語と同一である場合が大半を占める。それ以外の場合、対象を要求するタイプの VN であっても対象を伴うことは稀である（→文主語と VN の主体の一致・不一致により、対象・主体のノ格での表出はほぼ相補的になる。たとえば、「太郎は花子の邪魔をした」（主語＝主体：VN 句のノ格名詞は対象）「花子の邪魔が入ったので太郎は仕事を中断した」（主語≠主体：VN 句のノ格名詞は主体）<sup>18</sup>）。

上のまとめにもあるように、単に連体修飾要素が（文脈上明らかである等の理由から）省略ないし消去され、結果として SN が構文上単体で現れる場合もある。しかし、以下の（エ）（オ）（それぞれ「私たちの読書」「父の扶養」であるが、前者は自らの行為であることや構文的条件から表出できず、後者は直近の文脈から明らかなため省略されている）をはじめ、現代語では概算で単体の SN 全 314 例中 124 例、39.4%とそうした実例に事欠かないのに比べ、今回調査した限り近世語では（3）（4）など、専ら主体の項が省略ないし消去されている（自分の帰国、陰陽の進退）例に限られ、用例数も計 49 例、単体の SN 全体の約 8.2%と、比較的限られるようである。

- （エ）とりあえず私たちは判断を保留し、その状況をありのまま受け入れるしかなさそうだ。（ア）
- （オ）賭けごとの嫌いな堅物の仙吉は父を許さず、扶養の義務は果たす代り、ひとことも口を利かなくなつて、かれこれ十年になる。（あ）
- （3）其ノ妻女、歸國ノ期ヲ知テ、迎出テ早く其ノ夫ニ對面シ、長崎ニ於テ他女ニ交ハリ歸ル則ハ、其ノ顔色ヲ見テ早く之ヲ知り、急ギ其ノ一族ニ告ゲ、其ノ男ノ一族、會シテ忽チ之ヲ殺ス。（統）
- （4）夫れ陰陽の消長、變遷方無く、進退恆無し。（童）

位相の差などの問題もあり、確かなことは言えない部分もあるが、SN にまつわる事物の具体化が名詞句単体においては完結せず、文脈の中に託される度合いは現代語の方が高いということが言えそうである。

その他、現代語については佐藤（2007:45-48）で詳しく述べたが、これらとは別の事情によって SN が修飾を受けることができない場合もある。現代語の実例に見られた主なパタ

<sup>18</sup> これらの作例は佐藤（2009）で挙げたものとは異なるが、ここで述べる VN 句の特性をより顕著に示すものとして執筆中の博士論文より引用した。

ーンとしては、動作・作用一般に言及するもの(カ)、動詞述語文やそれに準ずる体言止めの用法(キ)<sup>19</sup>、第三形容詞<sup>20</sup>的に働くもの(ク)、複合語の前項<sup>21</sup>(ケ)の4通りが挙げられる。

- (カ) 担任の先生は、子供らしさがないと言って、少年を責めた。**努力**の尊さを説く先生に対して、少年は、**努力**なんて虚しい、といった態度を見せたようだ。(い)
- (キ) 「(略) 昨秋の関東大会ではノーヒットノーランを**達成**、一四〇キロ台の速球を武器とする、ひさびさの右の本格投手である。(略)」(ブ)
- (ク) **新調**のスキー服を着て、スキーとストックをかついだ仙吉が様子をつくり、門倉がライカを構えて撮っている。(あ)
- (ケ) 「もともとの**連絡**ミスだって、祥子さまだけに責任があるようにおっしゃいましたけれど。皆さんにだって——」(マ)

今回の調査範囲では、(特に漢学・仏教を基盤とした)抽象論において、単体のSNによって一般論としての行為が語られるような例が特に多く得られた(326例、単体のSN全体の約55%)。以下にいくつか例を挙げる。

- (5) 四端の心、生來具足、猶其の四體有るがごとし。**擴充**と云者は、即之を達するの謂なり。(童)
- (6) 惣じて**學問**と申候物は、自身ニわれと合點いたし候事にて御座候。(徂)
- (7) 出シカヌル金銀ヲ出サセ、人ヲ苦メ傷ルハ**殺生**ト云者ナリ。(都)
- (8) 然ラバ商人ノ**賣買**ニテ利ヲ得コトハ有ベキコトナリ。(都)

現代語では、こうした用法は上掲の(カ)など53例(単体のSN中16.8%)と、比較的少数にとどまる。そもそも小説では(作品の主題などにもよるが)こうした抽象論が展開される機会そのものが限られると考えられる。以下にいくつか例を挙げるが、上掲の近世語の諸例が多く(5)－(7)のように当該の事態が一般的にどのような性質を持つものかを表す例や、(8)のような一般論の中に登場する一般的な行為を表す例であるのに対し、現代語では大半が以下の(コ)(サ)のように個人的な好みや印象、対処の仕方といったことを述べる例が多く、上掲の(カ)や下の(シ)のように努めて客観的な描写は少数にとどまる(前者のパターンは47例、後者は6例)。

<sup>19</sup> このような例は、高橋(1984)で言う「動作づけ」の名詞述語文(例:「われわれもいよいよあす出発だ」「今夜のことはだれにも絶対に秘密よ」など(高橋 1984:30))に類するものと考えられる。筆者の調査でも「お前は反対か」など、これらと同様の名詞述語文も得られている。

<sup>20</sup> 従来の品詞論では多く名詞の一種とされていたが、連体修飾要素または述語としての機能しか持たず、その実態は形容詞的である「互角」「できたて」などの語。詳細は村木(2002)参照。

<sup>21</sup> (ケ)において「もともとの」が修飾しているのは「連絡ミス」全体であって「連絡」のみではありえないように、複合語の前項だけが修飾要素を伴うことは(「(シスターの管理)下」「(学校からの帰宅)途中」など一部の結合が弱い接辞・接尾語との結合を除いて)難しい。

- (コ) 私は歩くのが好きだ。/子供のころに何度も読んでもらったおとぎばなしの影響かもしれないが、私には、自分が森のなかで道を見失い、ぐるぐるとやみくもにさまよっているという感じがある。つねに、散歩は、そのイメージにすこしでも近づくので安心がいくのかもしれない。(神)
- (サ) あの頃二人は若く、悲しみや怒り、嫉妬や孤独感、侮蔑や憎しみ、そんな有害物質を分解するニトロゾモナスもニトロバクターも持ち合わせてはなかった。(パ)
- (シ) 自殺というものが、一種の病気だとすれば、この病気は伝染する。ウイルスや細菌で伝染するのではない。言葉が、病気を伝えるのだ。(い)

こうした差が単に資料のジャンルの違いによるものなのか、それとも近世と現代との日本語の質的な相違に起因するののかについては、さらなる検討を要するが、特に(5)のような当該の事態の概念そのものを規定するような例は、現代語ではほぼ用いられる機会がないであろう。

進藤(1963)では江戸期における漢語サ変動詞の使用について、仏教信仰の日常生活への浸透が影響していることが指摘されているが、その語幹の名詞用法もこうした仏教説話などから発展していったであろうことが見て取れる。

その他、上掲の(キ)(ク)に類する例についても近世語の実例は得られており、これらについては SNP の名詞性の問題を扱う際に詳述する(2.3.)。(ケ)のようなタイプについては、整理しきれない部分もあって雑多な感は拭えなくなるが別途扱うことにする(2.5.)。

### 3.2. 機能動詞結合<sup>22</sup>

現代語において特に問題の多い、機能動詞結合の実例も、数はあまり多くない(74例)が観察された。現代語で機能動詞と共起する SN および YN については佐藤(2008)などで詳しく論じたが、それらの用いられるパターンとしては、概略、以下の4通りが見いだされた。

- ①動詞句では実現しえない、連体修飾・複合を前提とする事態を、動詞的に述べる必要がある場合(e.g. 選択の準備をする、重要な発見をする。前者は動詞の項関係ではなく名詞に対する連体修飾・複合で初めて意味を充足させることが可能になる例、後者は事態を質的に規定する、副詞などに還元できない形容詞の例で、いずれも当該の事態を実行・実現することを言うためにはこれらを機能動詞とセットで用いる必要がある)
- ②名詞句として提示された当該の事態が、「するべきこと」としてあらかじめ意識された上で実行に移されるという含意を加える場合(朝のお祈りをする、マニュアル通りの応対をする。それぞれ「朝にお祈りする」「マニュアル通りに応対する」といった動詞文に比

<sup>22</sup> 機能動詞とは、「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞」(村木1991:203)。たとえば「さそいをかける」(≒さそう)「連絡をとる」(≒連絡する)ではそれぞれ「さそい」「連絡」が中心的な意味を担い、「かける」「とる」は実質の意味が希薄である。このような動詞を機能動詞、またこれらを含む語結合を機能動詞結合と称する。

べ義務的なニュアンス等が付加され、文脈次第では相互に置き換えられなくなる)

- ③動詞よりも優先的に用いられる、「VNP をする」以外の機能動詞結合〔寝返りを打つ、(親に) 負担をかける : 寝返る、負担させるといった動詞述語より用いられやすい)
- ④語感などの好みによる「VNP をする」構文、動詞文と意味的な相違は見いだしがたい例 (君の心配をする、入院をしている)

②については、近世語の語感が働かない以上その検討自体が難しいが、①③に関しては今回コーパスの構築にあたり得られたサ変動詞述語文の実例も含めて検討することが可能であると思われる。また、それらとの関連づけから、④の問題についても(主にサ変動詞の一語性について)ある程度考察できる余地があろう。

まず、今回の調査範囲において最も目についたのが、現代語において③に相当すると考えられる、すなわち機能動詞結合が動詞述語より優先的に用いられると思しきパターンである。典型的なものとして、以下の(9) - (11)のように、現代語では一般的にSNに対する連体修飾で充足される項目が、連用修飾の形で現れる例がある(4例)。

- (9) 慈圓の御もとへ參給ひ、歌を御稽古有し。(戴)
- (10) 此抄にも、三光院殿と御穿鑿有し止觀の説はのせ給はず。(戴)
- (11) ひとい來るを、すいがきより御覽あれば、俗人の身ながら、くわらをかけて参りし。(戴)

これらは現代語の「SN がある(緊急の連絡がある、中学入試の受験があるなど)」とは異なり、現代語にも「ご覧あれ(≡ご覧ください)」のような表現に化石的に残っている、敬語表現の一種であると考えられる。いずれも接頭辞「御」の付いた(あるいは(11)のように不可分な要素として含む)SNが構文上名詞として機能しながら、連体修飾などを受ける余地がなく(名詞性が弱く)、機能動詞とセットで動詞相当に機能する度合いが強い点で、現代語の「負担をかける」などの類と同様であると言えよう。「御SNす」という实例は見られないことから、少なくとも一種の敬語表現においては機能動詞結合を用いるのが普通であったと考えられる。

以下の(12)(13)は、複合(臨時一語化)によりSNの意味が具体化されているとも見られる(用例数のカウントではそうしてある)が、同作品から得られた(9) - (11)との関連で言えば連用の格助詞の省略である可能性も考えられる。

- (12) 又この比までおはせし公方様昌山公の本國寺にたて籠り給ひし時も、三人衆にはつかず、信長公御上洛なき間にも、青龍寺より切々出張し、御味方を申されき。(戴)
- (13) 歌御稽古有が、難義などをば少もとはせ給はず。(戴)

このように敬語的な「御SNあり」構文の用例は、大半が今回の調査範囲で最も古い『戴恩記』に集中しており(他には『徂來先生答問書』の1例があるのみである)、このあたり

は、古く動詞的に用いられた機能動詞結合の一種が何らかの理由で淘汰されていった可能性を示唆するものである。

なお、同じく『戴恩記』の例で、敬語的でない「SN あり」の例も（1例のみではあるが）得られた。

(14) 丸愚鈍にして、其跡をまねび、諸道に心をかけしにより、今玉まつりにかぞふれば、師の數五十餘人に及べり。/ちゑと冥加となきにより、一藝にも達せず、くやししく侍り。/後生の覺悟の爲に、かへりて恥辱ながら、爰に委く記し侍る。いづれの藝なりとも、わかきときより、たゞ一筋にすてず、稽古有べき事なり。(戴)

このような例には、「SN す」などに比べ、当該の事態を自然発生的かつ一般論的に述べることで動作主を背景化する効果が考えられる。現代語にも同様の「SN がある」の例は見られるが、(14)のように抽象論としての誡めのような形ではなく、以下の(ス)(セ)に見られるように、より現実描写的な使用が主である。

(ス)「森本、森本？」と僕は何回か声をかけたけれども、返事はなく暗闇と同じような沈黙だけが受話器の先にはあった。(パ)

(セ)今の電話にだけは出ないわけには行かない。今日は水曜日で、出張校正は明日あさつてに迫っている。切羽詰まった早苗やあるいは印刷所からどんな緊急の連絡があるかわからないからだ。(パ)

「あり」の例をはじめ、近世語の機能動詞結合を成す例には、動詞述語との間に揺れが生じていると思われる点が多々見受けられる。用例数が限られるため一般化は難しいが、近世語では、現代語には目立って多い(107例)SN句(連体修飾要素+SN)の機能動詞との結合は(15)などを含め12例、また現代語では27例見られるSN複合語の機能動詞結合は(12)(13)のような微妙な例も含め5例といずれも限られる。一方、単体のSN(現代語では98例)は(16)－(18)をはじめ57例と比較的多く用いられている。

(15) 標症ながら、急なるに取つき、先瀉を止め、其上ニて誠の療治をするも有之候。(徂)

(16) 殊更吾邦にて學問をいたし候ば、聖人と申候も唐人經書と申候も唐人言葉にて候故、文字をよく會得不仕候ては聖人之道は難得候。(徂)

(17) 上ニ立テ教ヒ導ク聖人無レバ、教ヲ聞テ不耕・貪食ヲ犯ス徒者モ之無ク、…(自)

(18) …且ツ擬議以テ變化ヲ成スト云語アリ。(作)

特に「學問」などは、前節で扱った(6)のような例(118例)や(13)などの機能動詞結合の例(4例)を含め、名詞用法の例が全147例と目立って多いが、一方で動詞用法と判断された例が以下の(a)(b)などわずか7例であることを考え合わせると、まだサ変的で

はない（少なくとも近世において「学問する」という語形自体がサ変動詞としては未成熟である）と言えるかもしれない。

- (a) 世上にて俗人之申候は、學問したる人は人柄悪敷と申候事偽にて無之候。(徂)
- (b) 汝ノ云ヘル如クナレバ、倅ニ 學問サセテモ、大ナル疵トモ成マジ。(都)

この語をはじめとして、いくつかの SN は機能動詞結合という構造の中で構文上では名詞として振る舞いつつ、動詞的な能力を発揮するという、真にサ変動詞たり得るに至るまでの過渡期にあるということが言えるかもしれない。ただし、名詞そのものの文献上の初出は古くは 611 年（「修行」など）から今回の調査範囲においてリアルタイムに発生したとされるものまで、語によって成立年代はまちまちであることが伺えるが<sup>23</sup>、サ変動詞としての用法が確立した時期については具体的に言及している資料が見当たらない。上の (11) に見られる「御覧」は、中世以前から名詞用法（御覧）・動詞用法（御覧ず）の双方が確立していたことが明らかであるが<sup>24</sup>、サ変動詞については今後の調査に待たざるを得ない。

なお、『日本国語大辞典 第二版』（オンライン版）では、「一定」「照應」「反求」は『童子問』が、「不耕」は『自然真営道』が、「剽襲」は『作詩志彀』が、それぞれ初出とされている。いずれも各作品において動詞用法も確認されており、新語としてのサ変名詞の姿が垣間見えるところである。もっとも、これらの語がなぜ、どのように生まれたのかについては現状では不明な部分が多く、今後さらに追究していく必要がある。

機能動詞結合の用例数は全用例の 1 割にも満たないが（9.3%強）、機能動詞の内訳も現代語に比べ限られる。具体的には、「あり」「なし」の他、(15) - (18) のように「する」やそれに準ずる、意味としては「実行する」というようなものが大多数を占める（68 例）。他には、以下の (19) (20) に見られる「始む」「止む」があるが、これらもそれぞれ始動相・終結相の局面を表す本質的な機能動詞であり、ある動詞が機能動詞としての用法を持つというのではなく、本来機能動詞であるような動詞である。

- (19) 金銀通用始テ、上下之ヲ惜ムノ欲心。(自)
- (20) されば趣向の穿鑿をやめて、たゞ誠實のおもひを詠出るにしく事なきを知るべし。  
(提)

一方、現代語に目を向けると、以下の (ソ) - (チ) のように本来の意味が失われ、機能動詞としての用法を持つようになる（ただし元のままの意味でも用いることが可能である<sup>25</sup>）ような動詞の例が多数観察される。

<sup>23</sup> 『日本国語大辞典 第二版』（オンライン版）（2009 年 9 月 10 日検索）による。

<sup>24</sup> 『日本国語大辞典 第二版』（オンライン版）（2009 年 7 月 29 日検索）によれば、動詞用法「御覧ず」は『竹取物語』（9C 末～10C 初）、名詞用法「御覧」は『源氏物語』（1001～1014 年頃）が文献上の初出である。

<sup>25</sup> 「子供を犯罪から守る」「友人の家を訪れる」「シャワーを浴びる」といった用い方を「元のままの意味」と考える。

(ソ) (略) カメラは抜け目なく機械の裏側にまわり、テレビの電源プラグが抜かれていることを示す。そう、このテレビは本当は死んでいるべきなのだ。固く冷たく、真夜中の沈黙を守っているはずなのだ。論理的に、原理的に。でも死んではいない。(ア)  
(タ) 年月が二人の間に横たわり、テレパシーのようにすぐ、深い理解が訪れてしまう。  
(キ)

(チ) 「でも、人から注目を浴びることは、一目置かれることでしょ。そしたら邪険な扱いを受けたりいじめられたり……無視されることはないわけでしょう？」(西)

このようなバリエーションは、今回の調査範囲においては見られなかった。上の(18)の「成す」などは生産動詞としての意味も有しているが、逆に言うと(18)においてもそうした元の意味が形骸化しきれておらず、機能動詞としてはやや周辺のとも言える。

仮に当時の機能動詞結合が現代語のように多様かつ柔軟な本動詞の転用を含まないとすれば、現在見られる様々な機能動詞の用法が成立するまでにどのような言語現象が介在していたのか、どのような契機があったのか、といったことは大きな問題となろう。無論それには、たとえば“take action”→「行動を取る」など欧文翻訳(特に明治期以降)の影響も多分に考えられるのであるが、「世話を焼く」「成功を収める」のようにそうした連想が難しい例もままあり、それらの歴史的変遷を探ることも筆者の研究において今後重要になってくると思われる。

SNを含む機能動詞結合が、SNに対応するサ変動詞とどのような点で異なるか(たとえば、「連絡を取る」と「連絡する」では何が違うのか)については、村木(1991)でも明らかにされておらず、筆者自身も調査の途上にあるが、何かしらサ変動詞と同一ではない表現効果を狙って用いられるということは言えよう。すなわち、一見して元の動詞との意味的な連関が薄い機能動詞と共起する現象の背景には、それだけ当該のSN・サ変動詞双方の地位が確立され、サ変動詞が日本語の語彙の中に「当たり前」の存在として定着するに至ったために、表現のバリエーションが求められたという流れが推察できる(無論このことの実否は、様々な語・機能動詞結合に関する通時的分析を基に検証する必要がある)。

### 3.3. 名詞性の弱いSN

一口にサ変名詞(SN)と言っても、その名詞性には様々な段階がある。現代語において、先に挙げた(キ)(ク)などの例は、形の上では名詞でありながら、機能の上では動詞や(第三)形容詞に近いものがあり、サ変「名詞」としては周辺的な用法と言える。

(キ) (再掲) 「(略) 昨秋の関東大会ではノーヒットノーランを達成、一四〇キロ台の速球を武器とする、ひさびさの右の本格投手である。(略)」(ブ)

(ク) (再掲) 新調のスキー服を着て、スキーとストックをかついだ仙吉が様子をつくり、門倉がライカを構えて撮っている。(あ)

もちろん、こうした用法ならではの表現効果というものも存在する。すなわち、「ノーヒ

ットノーランを達成した」「新調したスキー服……」というように動詞を用いるのではなく、(キ)(ク)のようにSNを用いることで、動詞が不可避的に含有するムードを介在させず、客観的な表現とするということである(佐藤 2007:80)。どちらの用法が歴史的に先行するかについては未調査であるが、表現のメカニズムは共通していると考えられる。

(キ)の「達成」が動詞に、(ク)の「新調」が形容詞に、それぞれ近い振る舞いを見せるというのは、あくまで個々の使用における用法上の問題である。同じ語について、「ノーヒットノーランの達成(が、地方紙に取り上げられた)」「スキー服の新調(には、お金が足りない)」というように、SN(名詞)然とした使い方も可能である。

一方で、近世語のこうした周辺的な用法の諸例を見ると、語によって用いられ方がかなり現代語とは異なる方向に偏っている。(21)の「一定」などは現代語でも第三形容詞的な用法が主になると考えられる(名詞的な用法があまり考えられない)が、(22)(23)の「通達」「發明」などは近世語において形容詞的な用法が中心となる(8例中7例)一方、現代語ではむしろそうした用法自体が考えにくいものである。

(21) 故ニ其聲調自ラ一定ノ法アツテ、嚴然ト具ハル。(作)

(22) 詩ヲ作ル人ハ温潤ナリ、詩ヲ好マザル人ハ刻薄ナリ、詩ヲ作ル者ハ通達ナリ、詩ヲ作ラザル者ハ偏僻ナリ、詩ヲ作ル者ハ文雅ナリ、詩ヲ作ラザル者ハ野鄙ナリ。(淡)

(23) 汝モ世間ノ少シ學問アル者ニ云聞サバ、是ハ發明ナル見識ナリト思ヒ、汝ヲ知者ノヤウニ思フベシ。(都)

コンピュータとしての「なり」と形容詞語尾の「なり」が、活用の体系も含めて同じように用いられることで、名詞・形容詞間の品詞性が流動的になることは近世以前の日本語において多分に考えられることであるが、むしろ第一義的に事態を名詞的に述べる形式であるはずのSNが形容詞的な用法を中心とする語たりえることの背景とはどのようなものであるのかは、興味深いところである。

下の(24)(25)のように連体修飾や複合によって意味が具体化される例もあるが、それも行為や現象を名詞的に述べる(動的)というよりは、ある事物がその状態にあるということ(静的)を述べるものであり、そうした点でも形容詞に近い働きをしていると言える。

(24) 故ニ其ノ書學ヲ止メテ直耕スル則ハ、乃チ易・曆・天文・陰陽ノ通達ナリ。(自)

(25) 四書五經の新注大全等、宋儒の語録類、詩文にては東坡・山谷・三體詩・瀛奎律髓之類、歴史にては通鑑綱目の書法發明等、皆損友と可被思召候。(徂)

その他、現代語に見られる動作づけ的なもの(上の(キ)などのタイプ)と考えられる例は、今回の調査範囲では以下の(26)1例しか見られなかった。

(26) 唯杜甫平生國を憂へ民を愛し、忠憤感激、一に皆之を詩に寓す。(童)

先にも述べたように、述語か連体修飾語かの違いこそあれ、動詞のテンスやムードを廃して客観的な表現とする効果が得られる点は第三形容詞的な諸例と共通である。これらの先後関係、用法の広がり方といった問題も、さらに突き詰める価値があるろう。

### 3.4. 失われた SN

前節では、現代語に比べ意味・用法が限定的になる SN について述べた。一方で、現代語には残ってこそいるものの、当時とは異なり SN とは呼びがなくなっているような用法も見られた。たとえば、以下の (27) などは、下の (c) に見られるような、現代語では失われたとして問題ないであろう「是非する」行為を名詞的に述べたものであるが、同様の名詞用法のみ現代語でも生きている（サ変名詞ではない、ただの名詞としての用法が今なお存続している）と思われる。

(27) 父母ニ對シテ是非ヲ論ズルモノニアラズ。(都)

(c) 是をしらずして、愚なる世の人の、皆誠の道と心得、其身にもひがことをし、たがひに是非して争ふことにもするは、氣の毒にも、笑止にも、またはおかしうも、翁が心にはおもふなり。(翁)

(28) のように現代語と同様、陳述副詞的な「是非(に)」の用法も((27)と同じ作品中)に見られるが、このことも併せて考えると、この語については当時、SN として幅広い用法を持ち、自由に使われていたということが言えよう。

(28) ソレハ丁寧ナル者ユヘ、重客ノ分ハ是非共自ラセラレ候。(都)

現代語にも、「極論」など名詞としての用法と副詞的な用法を併せ持つ(そんな極論は意味がないこれは極論こういうことだ) SN は存在するが、それらにおいて後者の用法は動詞ないし先述の「動作づけ」的用法の延長線上にあり(cf.「極論すれば」)、近世の「是非」のように陳述副詞にまでずれ込み、かつ SN としての用法も併せ持っているような例はほぼないと思われる。

以下の (29) の「長命」なども、現代語でも同様に用いられうと思われるが、(d) のような動詞用法は現在通用のものとは言いがたいため、現代日本語において SN とは呼べない(一方、当時は SN であると言える)。現代語では形容詞的な用法に限られるというのは、前節で扱った諸例とは逆のパターンである。

(29) 然ルニ彼ガ長命を嫌ハ、忠臣ヲ殺シコトヲ願ナリ。(都)

(d) 然シテ十年モ日本ニ住ンデ後ノ子ナレバ、長命ス。(統)

その他、1.1 節でも一覧を示したが、当時の SN で現代語では SN とは認めがたい語が 27 語と、名詞用法が得られた全 77 語の三分の一近くを占めているが、以下の (30) の「進退」

や (31) の「療治」など単なる名詞あるいは語構成要素（荒療治）として現代語に残存している例も数例見られる一方，(32) (33) のように二字熟語としてすら用いられないものも多数あり<sup>26</sup>，それらがどのように淘汰されていったのかも重要な問題となろう。

(30) 互性ハ、活眞自行ノ進退、八氣ノ妙道ナリ。(自)

(31) 尤なる様ニ聞え候療治は、大形は下手醫者のする事ニ候。(徂)

(32) 予詩ヲ學ビシヨリ四十餘年、今日ノ得ル所、大抵悟入ナリ。(淡)

(33) 故ニ日輪運回ノ本也。(統)

### 3.5. 語構成力の差異

2.1.節で言及した，(ケ)のようなタイプの実例は，今回の調査範囲において (34) (35) など3例しか見られなかった。

(ケ) (再掲)「もともとの連絡ミスだって，祥子さまだけに責任があるようにおっしゃいましたけれど。皆さんにだって——」(マ)

(34) 宮寺ノ奉加ヤ建立ゴトハ嫌ニテ、死後ニハ何ニ生レント思ハルハヤ。

(35) 蓋聖人の人を教ゆる，其の工夫條目，固に一端に非ず。

こうした結合の比較的弱い (SN の意味が生きている) もののみならず，SN を前項とする複合名詞の実例自体が，以下の (e) (f) も含め計4例しか得られなかった。

(e) 天下第一ノ賣買物是ナリ。(都)

(f) 先きは紙を返せども，我等は紙を返さず，讀人と吟味人と別に成，本文計を年月久敷詠暮し申候。(徂)

こうした具体物を表す複合名詞は，筆者の一連の研究において直接の研究対象 (SNP) には含まれないが<sup>27</sup>，SN はそれらにおいて様々なカテゴリーの名詞と一定の関係を有するものとして語構成要素になりえているものである。

今回の調査結果に関して言えば，近世には (f) のような語形成は現代ほど自由に行われていなかったと思われる。SN に下接する接尾辞の中でも今回の調査でほとんど見られなかった「人」「者」「機」といったものは，特に欧文翻訳が行われる中で発達した部分が大きいと考えられるが，詳細については今後の調査を期したい。

<sup>26</sup> その他，「團明ス」など，現代語では用いられない自を含むサ変動詞の例は見られたが，それらに対応する名詞用法の実例は今回得られなかった。

<sup>27</sup> なお，上掲の各例は先述した SNP の用例数にも含まれない。

### 3. 現代語との比較の整理

本稿で言及した、現代語と近世語とでSNの使用実態に顕著な差が認められる点として、以下の5点が挙げられる。

- ① 近世語では、仏教説話などにおいて個別一回的な事態よりは一般論的な事態（動作・作用そのものの性質、特徴といったもの）を述べる例が多い（2.1.）。
- ② 近世語において、機能動詞結合（SNをする/始める……）のバリエーションは現代語に比べ大幅に乏しい（2.2.）。
- ③ 現代語と比べてSNの名詞性が弱い例（「一定」「発明」など）がある（2.3.）。
- ④ 一方、逆に現代より豊かな表現力を持ち、今ではSNとは呼べない語（「長命」など）や消滅した語（「運回」など）もある（2.4.）。
- ⑤ 抽象名詞（「○○ごと」など）・具体名詞（「○○人」など）を問わず複合して新たな名詞を生産するSNの語構成は、現代語の方が質量ともに豊かである（2.5.）。

今回の調査は分析対象となる言語形式（二字漢語サ変名詞）および用例の出典（評論・国学）を限定して行った。いずれも当時としてはサ変動詞語幹が最もよく用いられていたと考えられる範囲であるが、そうでない部分（一字および三字以上のもの、漢語以外のもの）についても同様に分析して初めて「事態描写にかかわるサ変動詞語幹の名詞用法」の体系を描き出すことができるものである。また、筆者が研究の主軸としている、現代語の動詞性名詞全般との比較を行う上では、動詞連用形の名詞用法についても調査する必要がある。これらについて今回と同様の規模で用例収集・分析を行う上では課題も多いが、検討を重ねていきたい。

### 4. おわりに

以上、本稿では近世語のサ変動詞の一部について、その語幹の名詞用法の使用実態を、現代語との比較を通じて分析・記述した。限られた範囲の限られた語彙のみを対象としたこともあって、体系的な記述にはなりえておらず、また対象とした作品群が生まれた約200年の間に起こったであろう様々な変化についても解明できていない部分が多いが、いくつかの興味深い現象を見だし、通時的考察の足がかりを作ることができたと思う。

サ変動詞、SNの盛衰については、より大規模かつ各時代の日本語の実態を如実に反映するような資料を対象とした調査を行うことで明らかにしていく必要があろう。今回の限られた調査範囲だけでも、「講究」「生生」など、現代語では少なくともサ変動詞としては用いられがたいと思われるが、明治期頃まではサ変動詞の用法が生きていたとされるものがあり<sup>28</sup>、それらがどのように衰退していったのかについても通時的に整理する価値があると考えられる。

<sup>28</sup> 前者は田口卯吉『日本開化小史』（1877-1882）の例、後者は福沢諭吉『福翁百話』（1896-1897）の例が、それぞれ『大辞林』に掲載されている（ただし、これらが最後の実例である保証はない）。

その他、全体として大まかな傾向の指摘にとどまり、諸問題の背景についても一部を除き言及できなかった。すべて今後の課題としたい。

### [参考文献]

- 佐藤 佑 (2007)「現代日本語の動詞性名詞の研究」 東京外国語大学 修士論文。  
—— (2008)「現代日本語の動詞性名詞と『の』『こと』による名詞化について」,  
『日本研究教育年報』12: 21-45, 東京外国語大学。  
—— (2009)「現代日本語の事態描写に関する動詞連用形・サ変動詞語幹の名詞用法について—連体修飾句と複合語の形態分析—」, 『コーパスに基づく言語学教育研究報告 1 コーパスを用いた言語研究の可能性』103-128, 東京外国語大学大学院 地域文化研究科  
進藤咲子(1963)「漢語サ変動詞の語彙からみた江戸語と東京語」, 『国語学』54: 41-57, 国語学会。  
高橋太郎(1984)「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」, 『日本語学』3-12: 18-39, 明治書院。  
西尾寅弥(1961)「動詞連用形の名詞化に関する一考察」, 『国語学』43: 60-81, 国語学会。  
宮島達夫(1977)「語彙の体系」, 大野晋・柴田武(編)『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』1-41, 岩波書店  
村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』, ひつじ書房。

### [辞書類]

- 小学館国語辞典編集部(編)2000-『日本国語大辞典 第二版』 小学館 [オンライン版 <http://www.japanknowledge.com/top/freedisplay> ]  
松村 明(編)『大辞林 第二版』 三省堂 [オンライン版 <http://dictionary.goo.ne.jp/jn/>]

### [用例出典(現代語の文学作品)]

- 向田邦子 1981『あ・うん』…「あ」 文春文庫 新装版(2003)  
宮部みゆき 1989『パーフェクト・ブルー』…「ブ」 創元推理文庫版(1992)  
三田誠広 1990『いちご同盟』…「い」 集英社文庫版(1991)  
吉本ばなな 1991『キッチン』…「キ」 角川文庫版(1998)  
梨木果歩 1994『西の魔女が死んだ』…「西」 新潮文庫版(2001)  
今野緒雪 1998『マリア様がみてる』…「マ」 集英社コバルト文庫  
江國香織 1999『神様のボート』…「神」 新潮文庫版(2002)  
大崎義生 2001『パイロットフィッシュ』……「パ」 角川文庫版(2004)  
村上春樹 2004『アフターダーク』…「ア」 講談社